

アトリエ 琉游舎 だより 113号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/ 2021年9月8日発行
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



秋の彼岸会法要

9月23日(木)10時半から

☆彼岸は悟りの世界。煩惱に満ちたこちらの岸（此岸）に対して極楽浄土の向こうの岸（彼岸）を表します。私たちは六波羅蜜の教えを実践する事により彼岸へ渡ることができるとされていますが 凡人であるこの身では、六波羅蜜の教えを毎日実行することは難しいことなので、せめて春と秋の年2回はその教えを実行する。これが現在の彼岸法要の意味となっています。

☆ちなみに六波羅蜜とは彼岸へ到達（パラミータ）するための6つの実践徳目です。
1 布施：施しをする。 **2 持戒**：戒律を守り反省する。 **3 忍辱**：不平不満を言わず耐え忍ぶ。
4 精進：一所懸命努力する。 **5 禅定**：心を静かに保つ。 **6 智慧**：真実を見抜く智慧をもつ。

☆「彼岸」というとなにやら抽象的な場所に聞こえますが、私は日常のやすらぎのところこそが「彼岸」であると思っています。自分自身が自由で素直で柔軟になったときに顕れる心の平安が、「やすらぎのところ」であり、今生活しているこの場が彼岸です。

☆年に2回のお彼岸にはお墓参りや、おはぎを作ったり、茶をたてたり、瞑想したり、掃除をいつもより念入りにしたり、花を植えたり、鳥の声に耳を傾けたりと、いつもと違うことを一つ実践してみてください。それがあなた自身の年2回の六波羅蜜の実践です。

☆琉游舎で年2回の六波羅蜜の実践を一緒にしてみませんか？
 ☆琉游舎の活動は営利事業ではありません。また私は職業僧侶でもありません。お布施は一切お構いなきようよろしくお願い申し上げます。もちろん宗教宗派を問いません。すべての皆さんのための開かれた「場」です。皆さんのお越しをお待ちしています。

9・10月スケジュール			木	金	土	日
月	火	水	9	10	11	12
13	14 読書会 13時半	15	16 映画会 13時半	17	18	19
20	21	22	23 彼岸会法要 映画会お休み	24	25	26
27	28 読書会 13時半	29	30 映画会 お休み	10月1日	2	3 写経会 13時半
4	5	6	7 映画会 13時半	8	9	10
11	12 読書会 13時半	13	14 映画会 13時半	15	16	17

写経会
 9月12日(日)
 10月3日(日)13時半
 般若心経・自我偈・
 観音偈の手本を用意
 しています。

読書会
 9月14日・28日(火)
 10月12日(火)13時半
 日蓮の「立正安国論」
 と消息文を読みます。
 テキストもすべてご用
 意。お気軽にどうぞ。

映画会
 9月23-30日(木)
 お休みします

お盆前後に梅雨が舞い戻ったかのような天気が続きましたが、どうやらあれは秋雨の走りだったようです。八月下旬に暑さが戻っても梅雨明け直後のような強力な陽ざしは現れず、にわか雨が1日のどこかにはやって来てそのまま九月に入ると前線が本州に居座ってしまいました。これは紛れもなく秋雨前線のようなものです。私の作る畑の作物は今年の安定しない夏の陽ざしと気温で大分迷っているようです。例年であれば夏野菜はほぼ終了して空いた畑に大根や白菜、青菜の種を蒔いているのですが、今年はまだ夏野菜が居座っているため、畑が思うように空きません。例年であればそろそろ枯れ始めるミニトマトもピーマンもまだまだ採れ続けオクラはやっと採れ始めたばかりです。これから最盛期が来ると信じているのか、あるいは延命策を講じているのか、自然任せの夏野菜たちは自らに引導を渡せず、私同様やきもきとしているのではないのでしょうか。

私は58歳で会社を辞めました。58歳が役職定年だったからです。63歳まで会社で働くことや系列会社に転じる選択肢もありましたが私は信仰者の道に引導されたのです。「引導」は人びとの先に立って導くことですが、仏教用語になると迷っている者たちを悟りの世界へ導くことを意味します。引導されたその時の私は信仰心のかけらもなく経文の一つも読んだこともなく、信仰から一番遠いところで会社の利益のために毎日を生きる典型的な会社人間でした。だから誰が私を引導したのかと言えば、それはお釈迦様でも久遠実成の釈迦牟尼仏でも阿弥陀仏でもありえませんが、私を引導して下さった人びとは会社であり部下であり私を取り巻く社会システムです。社会の中の引導システムの一つが定年制や任期制です。後進に道を譲ることや、ポストを明け渡すと言うことです。しかし“余人に代えがたいから任期を延長します”や“若い者にはまだ経験不足だから任せる訳にはいかない”といったそのシステムを恣意的に変更して引導を無視することもできる脆弱なシステムでもあります。自然界では自然環境が生き物を引導し次の世代にいのちを繋ぐシステムができています。それが四季の巡りです。だから今夏のようにまだ引導されていない作物たち自身がやきもきする年があっても、来年もまた何事もなかったように繋がりたいのちの實りを私は受け取ることができるのです。

引導はそれを渡すことができ初めて成立します。”引導を渡す“は、葬儀の際に導師が棺の前に立ち、死者が悟りを得るように引導文を唱え人を仏のもとへ導き今生への別れを告げる儀式を言います。ここでは今生の別れのつらさだけが際だっただけが際だっただけですが、この儀式の本質は全ての生き物を仏の道に導くことにあります。僧侶は亡くなられた人が仏様と共に永遠のいのちを新たに生きて下さいと仏道にお渡しする役割を担っているのです。そして仏様が確かにその引導を受け取って下さり、その結果残された人びとの心の中に永遠のいのちとして生き続けることを明らかにします。これが”引導を渡す“と言うことです。自然界では自然がいのちを繋ぐ役割を担いますが、人間界では人の手を介して行わなければそのいのちの行き場がなくなり鎮魂されない彷徨える魂で溢れてしまいます。これは死者の魂だけの問題ではありません。社会システムの中で生者が引導される時その受け手は誰なのか、新たな仕事が受け手か、趣味か、社会貢献か、孫の世話か、それは人それぞれにふさわしいところに渡されるはずですが、今までの経験やノウハウを引き渡すように社会が要請（引導）し、次の自分にふさわしい役目を渡され引き受けることです。この社会的引導システムが機能しないと社会は停滞し不安や不満が起こります。社会の共有財産であるはずのものが継承されず、受け手のいないまま特定の個人のところで行き止まりになってしまうのです。これは共有財産を勝手に私物化しようとする人びとの執着心の仕業です。一方渡されない引導を受け取ろうにも受け取れないままの社会はいのちが繋がれない社会です。引導が機能しない社会は「貪欲・瞋恚・愚癡」の三毒^{注1}に支配された世界です。貪りと憎しみと無智に溢れた社会に生きる私たちが幸せであろうはずがありません。

最近山登りをテーマにした番組をよく見かけます。しかしどの番組も登山シーンだけで下山シーンを描きません。登山中のつらさや植物や景観をエピソードにしなが、頂上に着いたときの達成感を描くことが基本構成であることは理解していても、山の下り方に興味のある私にはどの番組も消化不良のままに終わります。地図に記載されている登山道であれば、足を前に踏み出し続ければ必ず頂上に辿り着きます。急登の岩場であっても手足を使えば足を踏み外すこともなく登ることができます。登り方は誰に教えられることもなく自然に身についたようなのですが、下りは私にはとても難しい歩き方で、未だに身につかずいつも滑ったり転んだりしています。私には山は登ることよりも下りることの方がはるかに難しく危険なことなのです。理由は簡単です。登る過程の苦労と頂上に着いた達成感とを、そこから下りることによって無に帰したくないからです。頂上で味わった喜びに未練と執着があるからです。人は登り続けることはできても自ら下りることができない生き物なのかもしれません。ただ登ったら下りなければ家に帰れません。だから私は山の神から渡される引導を不本意ながらも受け入れて、自らの足でよろけつまずきながらも山を下っていくしかないのです。

58歳の時引導された私のいのちはお釈迦様に渡され受け取ってもらえることができました。そして私は信仰者となることができました。私は社会が引導しお釈迦様に手渡しされた私自身をあるがままに頂くだけで山の下り方も同様に山の神の引導をありのままに受け入れて心地よく山を下りたいのですが、何かから下りることはどうやら簡単なことではなさそうなのです。だから引導システムが正しく機能する必要があるのですが、今の日本のそこかしこの頂上は居座って突き落とされない限り下りようとしないうで過密状態の有様にみえます。